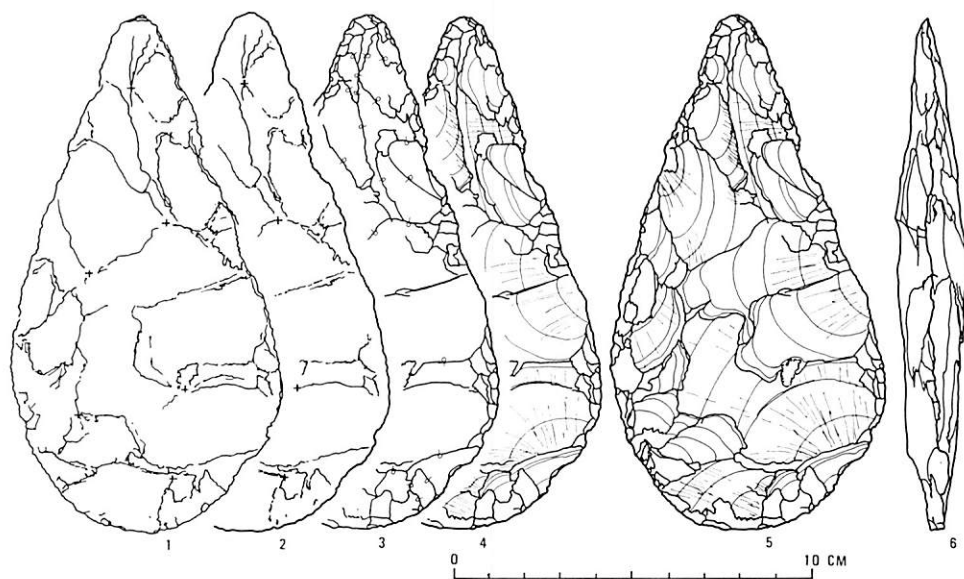


新たな石器の図化と応用について

埋蔵文化財センター

石器図化についての一応の成果は前年度の年報に書いた。その後、図化の相談にあずかる西尾元充氏より、問題点となっていた厚さに対する歪みを解決できたむねの朗報を受けとった。

機構はごく簡単である。鏡、ビームスプリッターを使用し、基本的にはレンズを用いないのでゆがみの心配はない。実大を原則とし、拡大図には拡大鏡を中間に置くこともできる。資料台上の遺物はファインダーを通して描画台上に虚像を写しだす。何はともあれ、この機構の重大な関心は厚さの処理にある。両眼でのぞくファインダーから、描画台上の虚像をたどる鉛筆の先端が、写真測量で使う図化機の本マークと同じ役目を果たしてくれる新事実がこの機構の重要な特徴となっている。したがって遺物台を上下させることによって、虚像上の任意の位置に本マークを置くことができる。これは描画台を基準面と考えると高さの異なる点を正射投影している結果になる。図示した石器はこうしてとらえた輪郭線と剝離面界線だけに限っている(図中の1)。この程度の図は3~5分で描き出せる。やや時間を要するが側面形の素図も同程度のものである。この素図をもとにして修正図をつくる。この機構ではどうしても描き出せない縁部の小剝離面などを注意深く修正する。この図のためには約2時間をかけている。要求に応じて短縮することもできよう。最後に面の切合関係、リング、フィッシャーをいれて10~20分で完成する。この機構は、他に金属器、木器、木筒、墨書土器など小形遺物の実測に応用してみたが、拡大率を除いて、正確さ、迅速性ともに有効であった。(松沢 垂生)



図化例(素描図から修正図へ)